

はじめの一步、未来をこのまちから

ショッピングセンターも、大きな繁華街も、娯楽施設もない。何も無いと言われる町だけれど、住みたい田舎として上位にランクインするなどメディアにも取り上げられるようになった浪江町。今回は浪江町で生まれ育ち、避難を経てUターン移住したお二人と田村市からIターン移住した人に浪江町で暮らす理由を伺いました。三人の生き生きと話す姿から、ふるさとの魅力が新たに見えてきます。



栃本 あゆみ さん
(室原出身)

2021年に浪江町へUターン移住し、2023年8月4日(金)、チャレンジショップから初めての独立となるおむすび専門店「えん」をオープンしました。



田中 将太 さん
(権現堂出身)

2021年に浪江町へUターン移住し、老若男女問わず愛される美容室を目指して、2023年7月20日(木)に美容室nen.をオープンしました。



具材と一緒に「ご縁」を込めたおむすび
(焼鮭と卵黄醤油漬)

「人と人のご縁を結ぶ」おむすび
「ただいま」と戻って来られるように」
栃本さんが、おむすび専門店「えん」をオープンさせようと思ったのは、震災後に、室原への帰還を望んでいた祖父母と父が避難先で亡くなったことがきっかけでした。家族を帰らせてあげることができなかった無念さが残っていた栃本さんは、「一町の人が、ただいま」と戻って来られるような、また、復興に携わる人たちが心も体も安らげるような場を作りたい」と決意しました。

2021年10月に町へ移住し、どのようなお店にしようかと思ったとき、おむすびが頭に浮かんだそう。県外で働き始めた頃、炊き立てのご飯で握られた、おむすびを食べ、心が癒された記憶がよみがえりました。

2021年10月に町へ移住し、どのようなお店にしようかと思ったとき、おむすびが頭に浮かんだそう。県外で働き始めた頃、炊き立てのご飯で握られた、おむすびを食べ、心が癒された記憶がよみがえりました。

「戻って来られるような、また、復興に携わる人たちが心も体も安らげるような場を作りたい」と決意しました。

2021年10月に町へ移住し、どのようなお店にしようかと思ったとき、おむすびが頭に浮かんだそう。県外で働き始めた頃、炊き立てのご飯で握られた、おむすびを食べ、心が癒された記憶がよみがえりました。

移住・起業の チャレンジ支援

栃本さんが利用した「チャレンジショップ」は、新しい浪江町を創り上げていく拠点の一つとして、新規事業者が活躍する場です。

起業を町の「復興」につなげ、 活気、を吹き込む手助けになりたい

田中さんは震災後、郡山市やベトナムホーチミン市で美容師として働き、新型コロナウイルス感染症の流行を機に日本へ帰国しました。

浪江町に戻ったきっかけを伺うと「母が浪江町で震災前の家業だった飲食店の再開に向けて動いていましたので、それを手伝うために戻ってきました。ゆくゆくは海外に渡航できるタイミングで、再びベトナムで美容師として働こうと考えていました」と当初は一時的な帰国だったそうです。



お客様一人ひとりとのご縁を大切に、
感謝の念を込めたヘアスタイルをご提案

田中さんは母親の家業を手伝う中で、「復興に携わる人たちの想いを知って、自分もできることで浪江町を盛り上げたい、町の人もヘアスタイルを楽しんでもらいたい」と浪江町の起業を考えたようになったそうです。

外国からの移住者が増えている浪江町の起業は、楽しみの一つとして、「ベトナムで培った国際感覚をもとに国籍関係なく、満足いただけるヘアスタイルを提案して、オシャレを楽しんでもらえたら嬉しいです」とお客様のオシャレを楽しむ姿が自身のやりがいにつながっていると語る田中さん。

店名に込めたある想いが、将来の楽しみにつながっているように、[nen.]にはお客様一人ひとりと「念」を持って、「一緒に『年』を重ねていく。『ご縁』を大切に長く付き合っていきたい」と願いを込めているんです。子供のお客様も多いので、成長を見守りながら働いて、美容室nen.に憧れた子供が大きくなって、一緒に働くことができたら本当に素敵なことですよ」と子供たちが憧れを持ってくれるようなお店にしたいと将来の夢も語ってくれました。

未来につなげる仲間をつくる



企画財政課移住推進係
左から 濱田洋平さん、白戸智係長
鈴木朋代さん、玉根吉正さん

移住推進係に聞く！ 未来につなぐ、今

浪江町企画財政課移住推進係です。町では、令和2年度から移住を推進する専門の係を設け、移住者の拡大を目指しています。

町の移住の施策は「まち・ひと・しごと創生 浪江町総合戦略(第2期)」に基づき進めており、「浪江町に向かうひとの流れづくり」に取組んでいます。

主な取組としては、移住定住相談窓口を設置し、ワンストップで相談いただける体制を整えているほか、移住前に町の生活を体験できる「お試し宿泊制度」などを設けています。また、町内での働きやすい場の確保としてワークスペース「ナミエシオンカ」の開設、浪江町での起業に関するイベントの開催、移住に関心がある人を対象とした相談会へ参加し、町のPRをするなど町を知ってもらう機会を創出しています。

令和5年6月30日時点において、東日本大震災後に新たに浪江町民となられた人は708人となっています。

移住された人は、活気に満ちた町を目指して起業する人、地域の人と人を繋げるため移住サポーターの活動や地域コミュニティへ参加する人など、地域においても活躍されています。

当係では移住を推進すると共に、町民の皆様と町を盛りあげていきます。



デザイン性と可変性の高い空間



起業や事業の成長を支えるワークスペース「ナミエシオンカ」



今、浪江町で起こっていることを知る
なみえ会議で情報共有を行う

浪江町での地域づくりが 私たちの生活につながる

「浪江町は新しく移り住んだ人にウエルカム感もあり、すぐに町の人と関わりを持つことができました」と話す小林さんは、福島市や郡山市で働き、田村市での復興応援隊を経て浪江町に移住しました。

移住当初はゆったり暮らしていましたが、20代、30代の若い世代が少なく、「若い世代がないと、何も始まらないぞ」と課題を感じ、もやもやが膨らんでいった小林さん。



小林 奈保子さん
(田村市出身)

2017年4月に結婚を機に浪江町へ1ターン移住し、子育ての傍ら、地域の人と人がつながる場づくりを目的とした任意団体「なみとも」を立ち上げました。また、子育てをするパパ・ママたちの応援を通じたコミュニティづくりを行う「cotohana」の共同代表、ふくしま12市町村移住サポーターなど多方面で活動しています。

町での生活を楽しみながら、
地域の人と活動する
家にいるだけでは、物足りない

やがて、少しずつ外から入ってくる若い人たちが増え、「いろんな人が集まれる拠点を作りたい!」という考えから、移住して間もなく任意団体「なみとも」を立ち上げたそうです。

現在は福島県の制度である「ふくしま12市町村移住サポーター」として、移住体験ツアーのコーディネートを行ったり、いわき・双葉の子育て応援コミュニティ「cotohana」の共同代表として、子育て支援を通じた地域コミュニティ醸成に取り組むなど多方面で活動されています。

子育ての傍ら、地域づくりと多方面への活動で大変なことも多い中、生き生きとしている理由を尋ねると、「家庭との両立は大変な面もあるんだけど、一人で抱え込んでいたら、いつか限界が来て潰れちゃう。だから、大変になる前に、周りの人たちに助けってもらっているんです。それに、一つひとつの活動は「地域づくりのため」というよりは、「自分たちが浪江町で楽しく生きていくために、町での生活を楽しながら、ゆとり、じっくり継続しているんです」と話します。

「ただ暮らすだけじゃなく、楽しみを見つけて欲しい」と。なみともは浪江町の若者のこと、なみともは聞けばわかる」との声も上がっているなみとも。

地域コミュニティに欠かせない存在となったその活動内容を伺うと、「結成時から現在まで、なみともが定期的に続けていくのが『なみえ会議』です。行政区域が浪江町に暮らす人、浪江町で仕事や地域活動をしている人、民間企業などが集まり、隔月1回、権現堂の集会所で情報共有をしています。始めた当初は、各支援団体の活動やイベントが重複していることも多かったのですが、協働を促したりしていました。なみえ会議は、そこから何かを生み出すというよりも『今、浪江町で起こっていること』を知り情報交換の場として活用しています。また、コロナ禍で生まれたオンラインコミュニティ「LINEオープンチャット」では、100人以上が参加しています」と話す小林さん。

オープンチャットの活用はコミュニティ形成だけではなく、「2022年3月に発生した震度6弱の地震の際、オープンチャットに避難所の情報や防災



LINEオープンチャット
「浪江町を楽しもう!! 誰でも参加OK!!」

行政無線から流れてきた情報などをみんなで共有しました」と防災の手段としても活用できることを教えてくれました。

「これからUターン、1ターンなどで浪江町にやってくるかもしれない人たちが、『何かを知りたい、一緒に何かをしたい』と思ったときに、気軽に声をかけて欲しいです。地域づくりをおとす、浪江町での暮らしの中に、『楽しみ』を見つけて、町に必要なモノをみながら創っていきたいです」と浪江町に住む私たちの手で、こうだったらいいなを、実現していきたいと話してくれました。

